

卒業生インタビュー

小児病院リハビリテーション部勤務 言語聴覚士
楠 優香（健康科学部心理学科 2016 年度卒業生）

言語聴覚士として、小児病院で働いています

私は、東京都内の小児病院のリハビリテーション部で言語聴覚士（以後、ST）として働いています。主な対象は自閉症や ADHD（注意欠如・多動症）、遺伝性疾患などにより日常生活に困難を抱えている子どもたちで、その言葉やコミュニケーション、行動面の発達を促すリハビリをしています。また、入所中の重症心身障害児・者の方々の定期的な評価やリハビリもしています。

さまざまな経験を通して、言語聴覚士という仕事に出会いました

中学・高校とも、生活の中心は部活動で、吹奏楽部に入って地域のお祭りや小学校、駅ビルコンサートや消防署等で演奏しました。大学時代は、1 回生のときだけ「京炎そでふれ！部 Tacchi」という創作ダンスのサークルに入っていました。

中学生のとき、友だちの中になかなか登校できない子や家庭環境の複雑な子がいたのがきっかけで、スクールカウンセラーになりたいと思うようになりました。

心理学科に入ってから、臨床心理士になろうと思ったこともありますが、大学附属の心理臨床センターが主催する親子イベントにボランティアとして参加、夏休みに療育施設を体験、卒論準備のための調査研究でこども園に入ったりする経験を通じて、だんだん ST をめざそうと思うようになりました。

心理臨床センターの親子イベントにボランティアとして参加しました

2 回生のときにボランティアとして参加した心理臨床センターの親子イベント「パパとママのこころ育て広場」は、就学前の子どもとその保護者や出産を予定しているカップルが対象で、子どもたちが遊んでいる間、保護者の方は子育ての悩みなどを互いに話し合ったり、臨床心理士の先生からアドバイスを受けたりします。

私たち学生は、子どもたちの遊び相手をするのですが、イベントが終わった後で先生たちとカンファレンスをして、「こちらから遊びを提案するよりも、その子のやりたいことに付き合うほうがいいよ」とか「イメージの弱い子には砂場遊びが効果的かもしれない」といったフィードバックをもらいました。それがすごく勉強になりましたね。

それに、単なるお手伝いではなく、実践者として学生と一緒にイベントをつくっていくという先生の姿勢に触れて、やりがいもありました。学生も先生も目的を共有し、一丸となって学問的

にアプローチしていく感じだったんです。だから、2回生が終わる頃には、先生に「来年も必ず参加します！」とメールしました。

学生への参加の呼びかけは、たしか心理学科の全員に向けて行われたと記憶しています。応じた学生は10人くらいで、最初は「子どもと一緒に遊べて楽しいな」と思う程度でしたが、結果が予測できる実験演習などと違って、何が起こるかわからない生の現場を経験できたことも大きな学びになりました。

療育施設の子どもたちとの出会いは、大きなインパクトがありました

療育施設の見学は、私が外部から講師として大学に来られていた先生に「何かできることはありますか？」と尋ねて、紹介していただき、2回ほど行きました。たぶん心理臨床センターのボランティアをしたことで先生方との距離が少し狭まり、話しやすくなったので、そういう質問をしてみる気になったのだらうと思います。

療育施設で出会った子どもたちは、ペットボトルを投げたり、机をバンバン叩いたり、高いところからジャンプしたりというふうに、特に行動面が激しくて、ちょっと怖いと思うような、とてもインパクトの大きい経験になりました。

いま思い返すと、あの子たちは、幼稚園・保育園で集団行動の難しさなど、親御さんも対応に困るような、現在の職場で関わっている子どもたちに最も近い状態だったのだらうと思います。当時の私はどう対処していいかわかりませんでした。この子たちのことをもっと勉強したいと思うきっかけになりました。

心理臨床センターの託児ボランティアで、カウンセリングの現場に関わりました

3回生の6月には、心理臨床センターで託児サービスのボランティアをして、保護者の方が先生のカウンセリングを受けている間、子どもたちと遊びました。

先生にはクライアントの情報について守秘義務があるので、保護者がどのような悩みや課題を抱えているのか、親子の間に何が起きているのかを詳細に教えてもらうことはできませんが、「パパとママのこころ育て広場」の参加者に比べると、たぶん主訴の明確な保護者が来ておられたと思います。

授業では箱庭療法を習うなどしていましたが、まだ何らかの資格を持っているわけではなく、具体的に実践できる立場ではなかったため、間接的ではあれ、このカウンセリングの現場に関わることで、「もっと深く勉強したい」と思うようになりました。

こども園のボランティアで、私は「子どもと“個別に、関わりたい”のだと気づきました

3回生の後期になると、ゼミの先生にこども園を紹介してもらい、卒論準備のためのデータ収集を兼ねたボランティアとして週1回通いました。朝から夕方まで集団適応につまづきのある子に付き添って、彼女が「いや」と発語したときの状況、回数、私の働きかけの内容、それに対する彼女の反応などを文字に起こして、数量的な分析と質的な分析を試みたのです。

私にとってこの調査研究の最大の収穫は、もちろん卒論の執筆につながる成果もありましたが、「子どもに関わる仕事がしたい」という漠然とした思いが「子どもと個別に関わる仕事がしたい」というふうに、より明確に定まったことでした。

子どもと関わるなら保育士という選択肢もありますが、こども園で集団適応につまづきのある子と過ごすうちに、臨床心理士やSTのように子どもと個別に関わりたいという意思が鮮明になったのです。

保育士の仕事をつぶさに見る機会にもなり、保育士さんの目線で指導していただくのと臨床心理士の視点で先生から指導していただくのと、その両方を経験して、「じゃ私はどっちでやっていきたいの?」と、自分を見つめる機会になりました。

余談ですが、調査が終わったとき、こども園が「引き続きアルバイトとして来てくれないか」と言ってくださって、卒論の準備が収入を得ることにもつながりました(笑)。

臨床心理士ではなく、言語聴覚士を選んだ理由

こども園で「いや」という言葉の発語データを採ったとき、言葉そのものに興味を持ちました。また、その集団適応につまづきのある子には食物を丸飲みするという癖があり、食事でも課題を抱えていたのですが、ST の仕事を調べると食生活の支援もすることがわかりました。

それに、ST が成人の脳血管疾患による高次脳機能障害にも対応することを知って、「私は、形の見えない心を対象とする臨床心理士よりも、『ここが損傷してダメージを受けたら、こういう疾患が出る』というふうに、原因と結果が明確なほうが安心して仕事ができそうだな。自分に合っているな」と思ったのです。

それで、大学卒業後はSTの資格取得をめざして専門学校(京都医健専門学校)の言語聴覚科(2年制)に進むことにしました。

STは、臨床心理学や発達心理学だけでなく、医学的な知識もかなり求められるので、専門学校ではそうした分野も学びましたが、大学で4年間しっかり心理学を学んだことがすごく役立ちました。

たとえば、子どもだけでなく保護者の方の悩みに留意することや、言葉の裏に潜んでいる心の面を意識しながら関わることなどは、大学の授業やボランティア活動で教えられたことで、現在の職場でも生きています。もちろん、これからも心理学的な視点を持つSTでありたいなと思っています。

学生ボランティアは、継続性とフィードバックが大切です

学生が行うボランティア活動は、継続性とフィードバックが大切だと思います。私自身、心理臨床センターの親子イベントや託児サービス、療育施設の見学、こども園でボランティアを兼ねた調査研究というふうに、次々と課題を抱え込み、そのつど先生や現場の方からいろいろな学びを得ました。適切なフィードバックがあり、そこで学んだことを活かすチャンスが継続してあったからこそ、自分の身についたという実感があります。

1回きりだと「勉強になった」で終わるし、フィードバックがなければ単なる「楽しい経験」で終わってしまうので、学生にとっては単発ボランティアよりも継続ボランティアのほうがいいかなと思います。

ボランティアは、情報と呼びかけがあれば参加しやすくなります

いまは東京で働いていますが、もし働く条件が京都にあれば帰りたいたいという気持ちはあります。京都でSTとして働いている人の話を聞くと、京都は同業者間の関係が密接で、連携も取れているという印象を受けるので、たぶん情報共有しやすい環境なのだろうと思います。

ただ、STという職種は女性が多く、産休や育休を取る人が多いので、京都でSTをしている友人も「人手不足が常態化していて、産休・育休の時期が重なると代替人員が確保できず、業務が回らない。そのわりに待遇はよくない」と話しています。その辺りの状況が改善されれば、京都でSTとして働くことに希望が持てますね。

私にとってボランティア活動は、いまの仕事に出会うことになった重要な取り組みですが、たぶん先生の呼びかけがなければ参加しなかったと思うんですね。その意味で、京都市からボランティア情報等の発信をしてくだされば、学生ももっと参加しやすくなって、進路選択の参考になったり、人として成長する機会を得られたりするのではないかなと思います。

